

【論 文】

春営地におけるツァータンのトナカイ放牧について

中 田 篤

はじめに

ユーラシア大陸北部に居住するトナカイ飼育民については、これまで数多くの民族誌や研究論文が公表されてきた。しかし、彼らの生業基盤となっているトナカイの管理方法、特に日常的な放牧については、あまりに日常的な活動であるためか、少数の例外を除き（例えば Ikeya 2001; 高倉 2000; Takakura 2004 など）、具体的で詳細な報告は少ない。

筆者はモンゴル国北部に居住するトナカイ飼育民ツァータン¹を対象に、日常的な放牧を含む家畜管理全般に関する調査をおこなってきた。ツァータンは、季節ごとにトナカイの放牧地と宿営地を移動させる生活を営んでいるが、これまで秋営地における日帰り放牧、搾乳のスケジュールや家畜誘導技法、冬営地における放牧方法などに関して報告してきた（中田 2003, 2006, 2007）。

しかしツァータンの場合、トナカイの放牧方法は季節的に異なることが指摘されている（バダムハタン 1967:34-35; 西村 2008:22-30）。また、トナカイの年間の繁殖生態、つまり出産や仔トナカイの成長とそれに伴う泌乳量の変化に応じて、搾乳の頻度や方法なども変化していると考えられる。そのため、上記のような季節的に限定された研究だけでは、ツァータンのトナカイ管理の全貌を明らかにするには到っていない。

こうした点を踏まえ、本研究では、春営地におけるツァータンのトナカイ管理方法を記述し、秋営地・冬営地との相違点を明らかにすることを目的としている。ここで春営地とは、ツァータンが3月末頃～6月末頃にかけて利用する営地を指す。そのうち特に4～5月はトナカイの出産期にあたるため、妊娠したメス、出産後のメスや仔トナカイの存在が放牧活動に与える影響についても考察する。

調査地と方法

調査は、2005年4月30日～5月8日の9日間にわたり、モンゴル国フブスグル県ツァガンノール郡の山岳地帯に位置する調査協力者の春営地でおこなわれた（図1）。

春営地は標高2100～2200mの山間部の谷間の南向き斜面、幅2～3m程度の小川近くに設置されていた。周囲はシベリアカラマツ (*Larix sibirica*)、シベリアマツ (*Pinus sibirica*) を中心とした針葉樹林となっており、林床部にはトナカイの餌となる地衣類が豊富にみられた。

屋外の日陰に設置した気温計によれば、

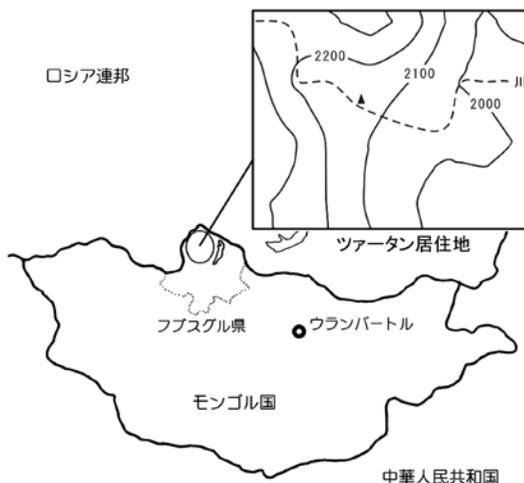


図1. 調査地の概要：実線は等高線（数字は標高）、破線は川、▲は宿営地の位置を示す。

調査中の気温は -17°C ～ 12°C まで変動した。降雪は数回みられたが、ほとんどの場合、日中には雪が融け、地表面は露出した状態となっていた。積雪に至った事例は調査期間中に 2 回（1 回目は積雪約 10cm、2 回目は 2～3cm）あった。

調査協力者の春営地に滞在し、トナカイ放牧に同行してその経路や家畜誘導作業について観察・記録をおこなった。移動経路の確認のため、放牧中は 15 分ごとに携帯用 GPS 機器（エンペックス気象計株式会社製、ポケナビ GPS II プラス）をもちいて位置を測定した。調査期間は 9 日間と短い、仔トナカイの 90%は春季の 2 週間以内に誕生するとされているため（クラットン＝ブロック 1989:220）、放牧活動における出産後のメスや仔トナカイの影響の評価という点に関しては最低限の調査データは収集できたと考えている。また、こうした行動観察と並行してインタビューをおこない、春営地におけるトナカイの放牧・管理方法の具体的内容やそうした方法を採用する理由に関して補足的なデータを得た。

なお、ツァータンは多くの場合、複数の世帯から成る宿営集団で生活している。調査期間中、協力者の世帯は、計 4 世帯で宿営集団を構成していた。4 世帯の家族構成と人数は次のとおりである。

A 世帯：50 歳代男性・40 歳代女性の夫婦、20 歳代前半の娘 1 人、10 歳代後半の息子 3 人 [6 人世帯]

B 世帯：20 歳代の夫婦とその 10 歳未満の娘 2 人 [4 人世帯]

C 世帯：30 歳代男性と 20 歳代女性の夫婦 [2 人世帯]

D 世帯：30～40 歳代の女性とその 10 歳前後の息子、同年代の姪 [3 人世帯]

なお、B 世帯の夫と C 世帯の妻は、それぞれ A 世帯夫婦の息子と娘である。

この宿営集団で、合計百頭余りのトナカイを所有し、共同で放牧をおこなっていた²。また、ほぼすべての成メスが妊娠中あるいはすでに出産しており、調査期間中にも順次出産が観察された。A 世帯の 40 歳代女性によると、この春営地に住み始めたのは 3 月 22 日からで、早い場合には 4 月初めからトナカイの出産が始まるとのことだった。また、B 世帯の 20 歳代女性によれば、4 月半ば～5 月 10 日頃が仔トナカイ誕生の最盛期だが、遅い場合には 6～7 月に生まれることもあるとのことだった。

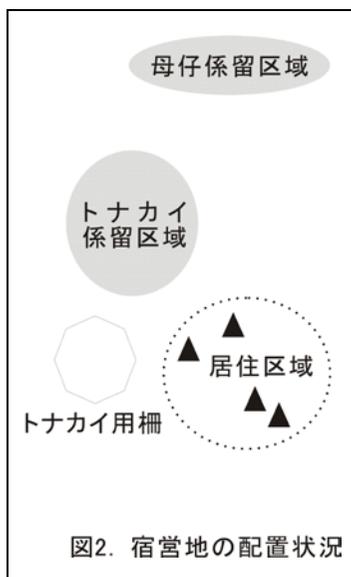
結果

宿営地の構成について

宿営地は、針葉樹林のなか、沢沿いの傾斜が比較的なだらかな場所に設定されていた。4 世帯の移動式住居は、それぞれ数～10 数 m の間隔で一定の範囲内に隣接して建てられ、居住区域を構成していた。居住区域に隣接して、北西側にはトナカイ用の柵とトナカイの係留場所（以下、トナカイ係留区域）が配置されていた。

カラマツなどを組んで作られた直径 10 数 m のトナカイ用柵には、1～3 歳の未成獣、成オス、使役用の去勢オス、出産までまだ時間のかかりそうな成メスが入れられていた。これらトナカイ用柵に入れられたトナカイが、主要な放牧対象となっていた。

トナカイ係留区域では、1～2m の間隔で地面に打たれた杭や切り倒した木などに、出産が近いと判断されたメスが 1 頭ずつ係留されていた。これらのメスの一部も放牧されていたが、放牧中に出産する恐れがあると判断された個体については、放牧の対象から除かれ、この場所に係留されたままとなっていた。



そして居住区域から係留区域を挟んで 40m ほど離れた場所には、出産直後の母トナカイと仔トナカイのペアが数 m 間隔で係留されていた（以下、母仔係留区域）（図 2）。母仔トナカイは、他のトナカイや人間の居住区域から離れた場所に係留され、他のトナカイとは異なるスケジュールで放牧されていた。また、出産後のメストナカイは乳を分泌するようになるので、搾乳対象となっていた。

表 1. トナカイの放牧活動時刻（網がけした部分）

月日 時刻	4/29	4/30	5/1	5/2	5/3	5/4	5/5	5/6	5/7	5/8
	851									
9:00		935		910	957		940	920	930	954
10:00			1030			1020				
11:00										
12:00	1230	1244		1225	1243		1253			1218
13:00			1338					1300		
14:00										
15:00									1522	
16:00				1650		1621				
17:00	1715				1715		1715	1730		1755
18:00		1843	1810							
19:00						1930			1900	
20:00	2015				2035		2047	2035		2031
21:00		2116	2100						2129	

放牧について

トナカイは、宿営地では上記の柵に入れられたり、係留区域につながれた状態で行動制限されている。そして規則的な放牧、つまり、宿営地から連れ出され、採食の機会を与えられ、一定の時間後に宿営地に戻されるといった管理を受けている。こうした「宿営地を離れてから戻るまで」の管理を「放牧活動」とした。

この放牧活動は、放牧される側の家畜群とそれらを管理・誘導する放牧者によっておこなわれているが、この両者から構成される放牧の単位となる集団を「放牧集団」と呼ぶことにした。放牧活動に同行する際には、基本的にはこの放牧集団を対象としたが、放牧集団が家畜群と放牧者に分裂した場合には放牧者に同行することとした。なお、家畜群には、出産したメスと仔トナカイ、そして出産が迫っていると考えられたメスを除くトナカイが含まれている。また、放牧者は、主に A 世帯と D 世帯の 3 人の少年が中心となって務めていた。

調査期間中、トナカイの放牧活動は、午前中と午後それぞれ 1 回ずつおこなわれていた



写真1. 2頭1組で放牧されるトナカイ

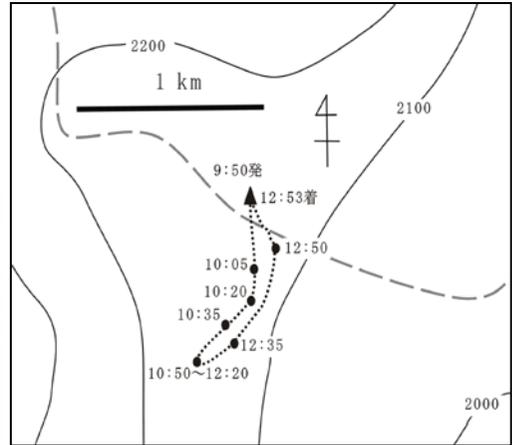


図3. 5月5日午前中の放牧活動コース：▲は宿营地、破線は川を示す。

(表1)。放牧開始・終了の時刻は、日によってばらつきがあるものの、概ね午前中は9時半頃から13時前まで、午後は17時過ぎから21時前までで、放牧活動の平均時間は午前中が3時間24分、午後が2時間48分といずれも3時間程度であった。

B世帯の女性によれば、この時期、昼に一旦宿営地に戻るのは、仔トナカイが生まれる可能性があるからとのことである。また、このような放牧方法は、6月上旬から中旬頃に、夏営地に移動するまで続くという。

次に実際の事例から、具体的な放牧活動の詳細を示してみよう。

〈事例1：5月5日〉

- 09:40 宿営集団の構成員の多くが協力し、放牧の準備を始める。トナカイ係留区域につながれているトナカイの紐を解き、頭部の装具同士を紐でつないで2頭1組の状態にして放す(写真1)。同様に柵内のトナカイも2頭1組にする。これは、彼ら自身の説明によれば、放牧中のトナカイの行動を制限するためである。そしてこの作業が終わるとトナカイ用柵の出入口を開放し、柵内のトナカイを追い出す。[放牧活動開始]
- 09:50 成人男性2名、少年2名の放牧者が使役用の去勢トナカイに騎乗し、協力してトナカイを一群にまとめ、誘導を開始する。トナカイは途中で採食のため停止しようとするが、放牧者はそれを許さず、後方からトナカイを追い立てながら移動する。
- 10:05 宿営地から100mほど離れたら、放牧者はトナカイの採食を許容しながら、ゆっくりと誘導していく。その間、それぞれ別々の方向に移動しようとするトナカイを集団に戻し、群を維持するよう努める。
※ここで、前日から行方不明になっているトナカイを探すため、成人男性の放牧者2名が放牧集団から離脱する。
- 10:45 放牧集団は木がまばらで見通しの利く谷間に差し掛かり、放牧者2名がトナカイの頭数を数える。
- 10:47 新たに1名の少年が放牧者として放牧集団に加わる。
- 10:50 放牧者たちは、狩りの獲物を探しに森の中に入る。トナカイ群はその場に放置されるが、比較的落ち着いた状態で採食を続け、次第に小グループに分かれて拡散していく。

11:00 放牧者たちが、獲物の鳥を手にも谷間に戻る。

11:05 放牧者たちは、拡散したトナカイを手分けして集める。

11:35 集めたトナカイを放牧者 2 名がその場に留め、残りの 1 名が付近に拡散したトナカイを探す

12:31 リーダー格の放牧者の「帰ろう」というかけ声を合図に、放牧者全員でトナカイ群の誘導を始める。

12:53 放牧集団が宿営地に到着する〔放牧活動終了〕。宿営集団の多くの構成員が協力してトナカイ全頭を柵に入れ（写真 2）、その後柵内のトナカイを選別して一部を係留区域に係留する。



写真 2. 放牧から戻ったトナカイを柵に入れる様子

このように、放牧者は放牧活動中はほぼ常時家畜群に付き従い、群が分散しようとするのを防ぎながら誘導していた。調査中に観察した 18 回の放牧活動のうち、16 回ではこうした方法が採られていた。

また、事例 1 は午前中の放牧活動を示したものだが、午後の放牧活動も概ね同様におこなわれていた。ただし、午後の放牧活動終了後には、万が一夜間に出産した場合に備え、妊娠メスはすべて係留区域につなぐということだった。

〈事例 2 : 5 月 4 日〉

10:20 少年 3 名が放牧者となり、トナカイ群の誘導を開始する。〔放牧活動開始〕

10:56 放牧者がリスを見つけ、トナカイを放置してリスの追跡を開始する。トナカイは採食しながら、少しずつ移動・分散していく。

11:11 少年の飼い犬がリスを樹上に追い上げる。放牧者たちは地上から木切れや石を投げたり、木に登ったりしてリスを捕らえようとする

11:37 放牧者たちはリスを諦め、トナカイの搜索を開始する。

11:51 放牧者たちがトナカイを発見し、一ヶ所に集め始める。

12:00 放牧者たちはほぼすべてのトナカイを集め終え、その場に放置する。トナカイは採食しながら、再び移動・分散し始める。

12:20～12:26 放牧者たちは再びトナカイを集め、その場に放置する。トナカイは採食しながら、再び移動・分散し始める。

12:30 放牧者たちがシマリスを見つけ、トナカイを放置して捕獲を開始する。

12:57 放牧者たちがシマリスの捕獲に成功する。

13:07 放牧者たちは分散したトナカイの搜索を開始する。

13:10 放牧者たちは一部のトナカイを発見し、一ヶ所に集める。

13:11 2 名の放牧者がトナカイを一ヶ所にまとめ、他の 1 名がトナカイを搜索に行く。

13:41 トナカイを搜索していた 1 名が発見したトナカイとともに合流し、放牧集団として移動を開始する。

14:08 放牧集団が見晴らしの利く谷間に達すると、放牧者たちはトナカイを一ヶ所にまとめ、

先ほど捜索に行った1名を見張りとして残し、他の2名がトナカイの捜索に行く。

- 14:26 トナカイ数頭が横になり、反芻を始める
- 14:41 大部分のトナカイが横になり、反芻する
- 15:09 2名の放牧者が戻るが、トナカイは不明のままである。
- 15:23 トナカイ5頭が自発的に放牧集団に戻る。
- 15:28 トナカイ2頭が自発的に放牧集団に戻る。
- 15:30 放牧者1名を見張りに残し、2名がトナカイの捜索に行く。
- 15:57 トナカイ不明のまま、2名が放牧集団に戻る。
- 16:00 放牧者がトナカイ群の誘導を開始し、宿営地に向かう。
- 16:21 放牧集団が宿営地に到着する。[放牧活動終了]
- 16:22 トナカイを柵に入れ、選別する。

この事例2の場合、放牧者がリスの捕獲に熱中し、家畜群の誘導・維持作業を怠った結果、トナカイは移動・分散してしまい、その後の捜索に多大な時間を費やすことになった。その結果、この5月4日午前中の放牧活動は4時間1分に及び、その影響か、午後の放牧活動は1時間20分に短縮された(表1)。

〈事例3：5月6日〉

- 17:30 杭につながれているトナカイを2頭1組にして放し、トナカイ用柵内のトナカイを追い出す [放牧活動開始]。
- 17:37 放牧者の少年2名がトナカイの誘導を開始する。
- 17:55 イヌがシマリスを発見し、放牧者たちもリス捕りを開始する。トナカイは採食しながら、移動・分散し始める。
- 18:40 イヌがシマリスを捕獲する。
- 18:46 放牧者たちがトナカイの捜索を開始する。
- 18:52~19:04 放牧者がトナカイを発見し、一ヶ所に集める
- 19:05 イヌが再びリスを発見し、放牧者たちは再びリス捕りを開始する。トナカイは採食しながら、移動・分散し始める。
- 19:08 放牧者がトナカイの捜索を開始する。
- 19:12 放牧者は、見通しが良い谷間にトナカイを集める。1名がトナカイ群を見張り、もう1名が他のトナカイを捜しに行く。
- 19:30 トナカイを捜しに行った放牧者が1名で戻り、もう1名が交代で捜しに行く。
- 19:52 放牧者がトナカイ10頭を連れて戻る。
- 19:55 放牧中のメストナカイが出産し、放牧者たちは様子を見守る。
- 20:10 放牧者の1名が生まれた仔トナカイを抱き上げ、宿営地に戻る。残った放牧者1名がトナカイ群を誘導し、ゆっくりと移動を開始する。
- 20:30 宿営地に仔トナカイを置いてきた放牧者が放牧集団に戻り、2名で誘導する。
- 20:35 放牧集団が宿営地に到着する。[放牧活動終了]
- 20:37 トナカイ群を柵に入れる。

宿営地では、毎日妊娠したメスの状態を調べ、出産が近いと思われる個体は係留区域につないで放牧活動に参加させないようにしていた。しかし、この事例3のように、稀に放牧活動中に出産してしまうメスもいるということである。

調査期間中に放牧者がトナカイ群に同行した放牧活動 16 回の全移動経路は、図 4 のとおりである。放牧活動は宿営地の南側、そして宿営地の脇を北西から南東に流れる沢沿いを中心に、宿営地（A 世帯住居を中心点とする）からほぼ 1km の範囲内でおこなわれていた。

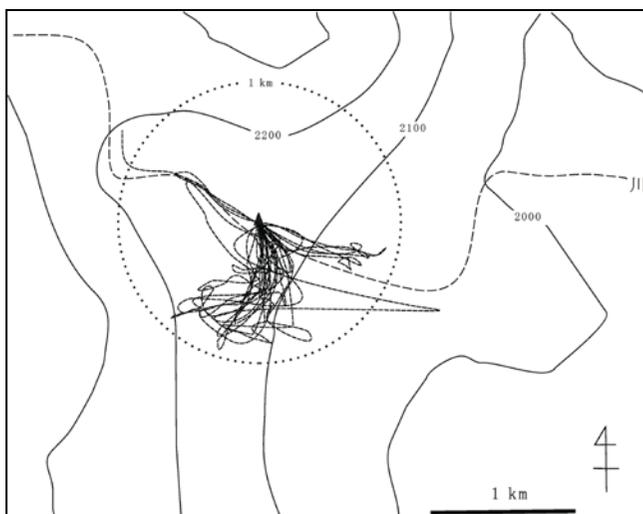


図 4. 放牧活動のコース：▲は宿営地、点線は宿営地から 1km の距離、破線は川を示す。

さて、18 回の放牧活動のうち、放牧者が家畜群に同行しない次のような事例が 2 回観察された。

〈事例 4：4 月 29 日〉

- 08:51 杭に係留しているトナカイを 2 頭 1 組にして放し、同時に柵内のトナカイを放逐する。
[放牧活動開始]
- 08:59 2 名の放牧者がトナカイの誘導を開始する
- 09:05 トナカイ群を宿営地の西側に追い出して誘導を止め、2 名の放牧者は宿営地に戻る。
(トナカイ群は、そのまま放置され、それぞれ採食しながら移動・分散していく。)
- 10:50 2 名の放牧者がトナカイに騎乗し、トナカイを集めるために宿営地を出発する。
- 12:30 2 名の放牧者がトナカイを集めて宿営地に戻る。[放牧活動終了]

つまり、事例 1 では放牧者が家畜群に同行していたが、この場合は最初に家畜群を一定の方向に追い出した後は、自由に行動させている。

放牧者の 1 人によれば、雪が積もるとトナカイがあまり動かないので、放牧はトナカイを追い出して終わりにするとのことであった。

また、B 世帯の女性によれば、雪が解けて積雪が少なくなると、トナカイの足跡を追跡しづらくなるので、常時放牧者が同行する春型の放牧方法にし、雪が降ると足跡を追いやすいので、トナカイを放置する冬型の放牧方法にするとのことである。実際この方法が観察されたのは、それぞれ約 10cm、2~3cm の積雪があった 2 日間の午前中の放牧時であった。

出産したメスと仔トナカイの放牧／搾乳スケジュールについて

出産したメスと誕生したばかりの仔トナカイは、上述の放牧集団とは異なった方法で管理さ

れる。B 世帯の女性によれば、出産したメスと仔トナカイは、次のようなサイクルで放牧されるとのことだった。

- 08:30 つないでいたメスを放牧し、放牧していた仔トナカイをつなぐ。
10:30 放牧していたメスをつないで搾乳し、その後仔トナカイを放牧する。
(搾乳後、放牧された仔トナカイは母トナカイの乳を吸う。)
13:30 つないでいたメスを放牧し、放牧していた仔トナカイをつなぐ。
16:00 放牧していたメスをつないで搾乳し、その後仔トナカイを放牧する。
(搾乳後、放牧された仔トナカイは母トナカイの乳を吸う。)
18:00 つないでいたメスを放牧し、放牧していた仔トナカイをつなぐ。
20:00 放牧していたメスをつないで搾乳し、その後仔トナカイを放牧する。
(搾乳後、放牧された仔トナカイは母トナカイの乳を吸う。)

※夜間はそのまま

実際の観察では、搾乳と母仔トナカイの放牧は、次のようにおこなわれていた。

<事例 5 : 4 月 29 日>

- 11:40 B 世帯の女性が仔トナカイの近くにいる母トナカイを杭につなぎ、二本の前足を紐で括って搾乳する(写真 3)。搾乳終了後、仔トナカイの紐を解いて放すと、仔トナカイは母トナカイに接近し、その乳を吸う。

<事例 6 : 4 月 30 日>

- 14:00 A 世帯の女性が仔トナカイを杭につなぎ、母トナカイを放す。母トナカイはそのまま近辺で自由に採食する。

観察した事例では、放牧・搾乳の時刻は多少違っていたが、その方法は B 世帯の女性の説明通りだった。母トナカイがつながれている場合、仔トナカイはその近くから離れず、逆に仔トナカイがつながれている場合には母トナカイはその近くを離れない。出産後 2~3 日が経過すると、仔トナカイは次第に母トナカイから離れるようにはなるが、それでも母仔係留区域から大きく遠ざかることはなく、調査期間中はおもに母仔係留区域と居住区域の間の空間を動き回っているようだった。



写真 3. 搾乳の様子

仔トナカイの移動性が高まると、杭につなぐために捕まえるのが困難になる。そうした場合には、塩を示して仔トナカイを誘引するという方法が採られていた。

B 世帯の女性によれば、出産直後は上記のようなスケジュールで 1 日 3 回の搾乳をおこなうが、しばらく経つと母トナカイが仔のところに戻る頻度が減ってくるので、それに従って搾乳回数も減り、夏営地では搾乳は 1 日 1~2 回になるということである。仔トナカイは、8 月中旬頃まではこの形式でメスと交互に放牧するが、それ以降は他のトナカイと

一緒に2頭1組で放牧する。

なお、メストナカイには乳房が4つあるが、その日1回目は乳房1つ、2回目は2つ、3回目は1つだけから搾乳し、他は仔トナカイのために残す。なお、一つの乳房から得られる乳量は150～200ml程度とのことである。

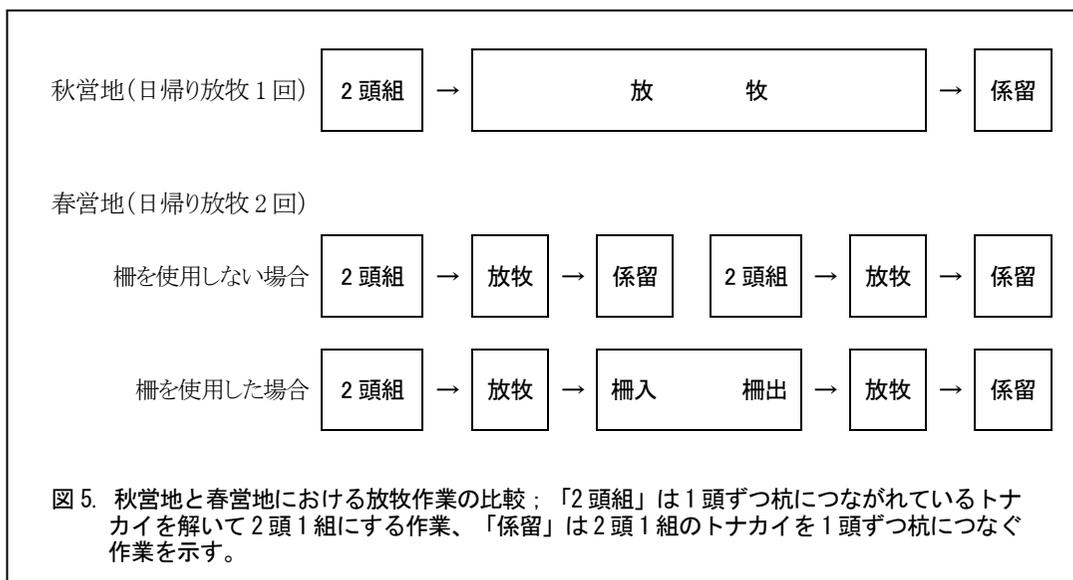
考察

宿営地の配置について

当研究の結果から、春営地においては、宿営地付近にトナカイを留め置くために柵と杭という二つの手段がもちいられていることが示された。ツァータンによるトナカイ用柵の利用は、社会主義体制下でトナカイの大量飼育が推進された際に、多数のトナカイを効率よく管理するために取り入れられた方法であり、柵に入れない方がトナカイの健康状態は良いとされている（西村 2008:30）。

柵をもちいない秋営地では、1頭ずつ杭につながれているトナカイを2頭1組の状態にして放牧し、宿営地に戻ると2頭を結ぶ紐を解いて再び1頭ずつ杭につながぐという方法を取っていた（中田 2003:60）。秋営地では1日1回の日帰り放牧³であったが、それでもこうした作業には家族総出でそれぞれ15～20分程度の時間が費やされていた（中田 未発表データ）。春営地では、日帰り放牧が1日2回と倍増しており、さらに出産を控えた妊娠メス、出産後のメスや仔トナカイに対する世話など、トナカイの管理に関する作業量が多い。こうした状況の中、多数のトナカイを柵に入れて出入口を閉めるという方法は、各トナカイに対する個別の管理はできないものの、トナカイ管理の省力化にはつながっていると思われる（図5）。

一方、妊娠メスや出産メス、仔トナカイの管理には、きめ細かい個別の対応が必要とされている。例えば妊娠メスの出産の時期には幅があるため、放牧を終えてトナカイ群を柵に入れた後に、出産が近づいていると思われるメスを選び出して1頭ずつ係留区域につながぐといった管理をおこなっている。これは、多数のトナカイが動き回る柵内は、出産するメスあるいは生まれたばかりの仔トナカイにとって悪影響があると認識されているためと思われる。



また、係留区域のトナカイに対しては、夜間にも出産していないか時々見回りに行くなど、常に注意を払っているようであった。そして出産直後のメスと仔トナカイは、母仔係留区域に移され、他の母仔のペアとは数mの距離を置いて係留された。トナカイは生息する環境によってツンドラトナカイとシンリントナカイに大別されるが（クラットン＝ブロック 1989:218）、このうちシンリントナカイの場合、メスは出産時には分散し、仔トナカイと共に身を隠す性質があるとされている（Geist 1998: 329, 331）。北方ツングースが飼育するトナカイはシンリントナカイと思われるが⁴、そのメスは家畜群や宿営地から離れて出産する傾向があるという（シロコゴルフ 1941:58）。ツァータンの家畜トナカイもシンリントナカイと考えられるので、出産時には野生個体と同様の環境を選好し、そうした環境の下でより安全に生産あるいは仔の世話ができるのではないだろうか。母仔係留区域は、こうした条件を満たすように作られていると思われる。

さらに、母仔係留区域は居住区域からもっとも離れた位置に設置されている。A世帯の男性によれば、生後間もない仔トナカイにとって見慣れない人間の接近はストレスになり、場合によっては死ぬこともあるとのことであった。ツァータンの宿営地には、他の宿営地などから、頻りに訪問者が訪れる。母仔係留区域が居住区域から離れた場所に設置されているのは、こうした外部の人間によるストレスを避けるという点にも配慮しているためと考えられる。

このようにツァータンは、個別かつ細心の対応が必要な生産を間近に控えたメストナカイ、生産したメストナカイと仔トナカイの管理には杭をもちい、それ以外のトナカイの管理には柵をもちいることによって、トナカイ群全体の管理に関する作業量を減らし、効率化を図っているのではないだろうか。

放牧活動について

本調査の結果から、春営地におけるツァータンの放牧活動は、常時放牧者が同行する形式で、1日2回の頻度で実施されていることが示された。

日常的な放牧活動の際、家畜群の管理者として人間が常に同行するという形式は、ヒツジやヤギの放牧方法としては広く知られている（例えば松原 1983:28-34; 谷 1987:153-154; 松井 1989:156, 2000:17-22）。しかしツァータンの場合、秋営地では放牧活動の一部で放牧者による家畜の誘導がみられるものの、放牧の開始から終了まで連続的に放牧者が同行するという形式ではない（中田 2003:60, 2007:42）。また、冬営地では、放牧者による部分的な誘導すらみられない（中田 2006:31）。春営地における放牧活動では、なぜこのような密な放牧管理形式が採られるのだろうか。

第一の要因として考えられるのは、春の牧地ではトナカイの移動・分散性が大きいという点である。これにはさらにトナカイ自体の活動性と放牧地の地形的条件という二つの要素が想定できる。

春には雪が解けて花が咲き始めるため、そうした花を好むトナカイの活動性が高まることが指摘されている（バダムハタン 1967:34; 西村 2008:23）。

また秋の放牧地が稜線という自然の障壁に囲まれていて、それらによってトナカイの移動・分散が限定されていると思われる（中田 2007:52）のに対し、春の放牧はそうした障壁のない森林でおこなわれるため、トナカイはあらゆる方向に移動することが可能である。

こうした条件の下、トナカイの放牧を安定的におこなうためには、放牧群を常に監視し、その移動や分散を制限する放牧者の存在が必要になるに違いない。実際、放牧者による管理活動

が欠如した場合、トナカイが分散し、その後の放牧スケジュールに影響を与えるといった5月4日の事例2が観察されている。

第二の要因は、トナカイの繁殖サイクルである。春はトナカイの出産期であり、妊娠したメスは漸次出産する。ツァータンたちは妊娠メスの状態を常にチェックし、できるだけ宿営地で出産するように管理しているが、そうした努力にも拘わらず事例3のように放牧中に出産する場合がある。このような場合、仔トナカイを保護しなければならないため、常に放牧者が監視する必要があるのではないだろうか。

このことは、秋営地と比較して春営地での1回の放牧時間が短く設定されている点からも示唆される。B世帯の女性の説明からも示されるように、放牧時間を短縮することによって出産間近のメスを宿営地に留め置く機会を増やすとともに、宿営地から近い場所で放牧することによって放牧中に出産した場合には速やかに宿営地に戻ることができるようにしていると考えられる。

ロシア連邦トバ共和国のトバの場合、通常はあまり密な管理をおこなわないが、出産期には宿営地の近くでトナカイを放牧し、日暮れ前には宿営地に戻して朝まで係留しておくといった管理をおこなっている (Vainshtein 1980:125)。

母仔トナカイの放牧・搾乳スケジュールについて

母トナカイと仔トナカイは母仔係留区域で管理され、一方をつないでいる時に他方を放すというように交互の放牧をおこなっていた。この放牧方法は、母仔が大きく分離しないというトナカイの行動特性を利用し、一方を決まった位置につなぎ止めることによって、もう一方の行動を制限しているものと考えられる。

こうした放牧・管理方法は、モンゴルにおけるウシの放牧・搾乳と同様であると思われる。梅棹によれば、モンゴル（中国・内モンゴル自治区）では、ウシの放牧をおこなう際、成群と仔群を別々に管理している（梅棹 1990:251-254）。成群には放牧者は同行しないが、自発的に宿営地に戻るため、その際に搾乳をおこなうという。梅棹は、一定時間が経過すると母ウシの乳が張り、授乳に対する欲求が高まるために自発的に宿営地に戻るとした。そして、こうしたウシの行動特性を利用した管理法は、「子おとり」あるいは「子の人質化」と呼ばれている（谷 1976:20; 小長谷 1990:656, 1999:78-79; 梅棹 1990:254）。ツァータンによる母トナカイの管理も、この「子おとり」を利用した方法であると思われる。

本研究により、春営地におけるツァータンの日常的なトナカイ放牧、妊娠メスと出産メス・仔トナカイの保護管理、搾乳スケジュールなど、秋営地・冬営地とは異なるトナカイ管理の概要を明らかにすることができた。ユーラシア大陸におけるトナカイ飼育は二つの形態、つまりツンドラ地域でみられる大規模な群を管理する型（ツンドラ型）と、タイガ地域でみられる小規模な群を管理しつつ、狩猟・漁撈を営む型（タイガ型）に大別できる（斎藤 1985:128）。ツァータンのトナカイ飼育はタイガ型に分類されるが、本稿で示した春営地の管理を含め、特に人間とトナカイとの関係が密接であるように思われる。

例えば、ロシア連邦サハ共和国でトナカイ飼育に従事するエベンは、ツァータンと同じタイガ型のトナカイ飼育民に分類されるものの、まったく異なるシステムでトナカイを管理していることが明らかになっている（高倉 2000:216-219; Takakura 2004:54-57）。彼らの飼育トナカイは、大きく公トナカイと家トナカイの2つに分けられるが、このうち公トナカイは肉を目的と

した屠殺の対象であり、家トナカイは使役や搾乳の対象となっている。そして日常的な家トナカイの管理は、放牧されているトナカイを毎朝集め、使役用・搾乳用のトナカイを捕獲し、その他のトナカイを宿営地付近に留め置き、夕方にはすべてをふたたび放牧するといった方法でおこなわれている。

こうした管理方法の差異は、地形や植生などの自然環境、飼育頭数の規模、それぞれの地域における歴史的背景などに起因すると思われるが、タイガ型のトナカイ飼育に分類されていても、実際のトナカイ管理方法には地域や民族によって大きな変異が存在する可能性がある。

今後、夏営地におけるツァータンのトナカイ管理方法に関する情報を加え、ツァータンの年間を通じたトナカイ管理の詳細を明らかにしていきたい。

もう一つの課題として、より多くの地域の事例を検証し、タイガ型のトナカイ飼育におけるツァータンの特異性を解明するとともに、地域間・民族間におけるトナカイ管理方法の比較検討をおこなっていきたいと考えている。

注

1. 本来は、現在のロシア連邦トバ共和国とモンゴル国の国境を跨いで移動生活を送っていたチュルク系民族トバの一集団だが、ロシア・モンゴル間の国境確定に伴い、モンゴル国籍を得た人びとである。現在、約30世帯が数百頭のトナカイを飼育しながら移動生活を送っている。
2. 協力世帯は、ツァータン全体の中でもっとも多くトナカイを所有している世帯の一つである（稲村2000:105）。
3. 放牧の形態の一つで、宿営地を起点とし、その日のうちに宿営地に戻る方法を指す。
4. シンリントナカイはツンドラトナカイより大型で、ほぼ北緯65度より南に分布している（クラットン=ブロック 1989:218）。

謝辞

本研究をおこなうにあたり、現地状況の把握、交通手段の確保、通訳などに関しては、西村幹也氏にご協力いただいた。現地協力者とそのご家族、同じ宿営集団を形成していた家族の方々には、トナカイの出産という忙しい時期に著者を受け入れ、調査を許可していただいた。食料その他物資の調達、ウランバートルから調査地への移動など調査全般に関しては、シンジェー氏にお世話になった。また、本論の執筆にあたって、査読者の方々から有益かつ建設的なご指摘をいただいた。これらすべての方々感謝する。

なお、本研究は、平成17年度文部科学省科学研究費補助金（奨励研究）、「ツァータンのトナカイ遊牧文化の伝統とその変遷について」（課題番号17909011）によって実施されたものである。

参考文献

バダムハタン, S.

1967 「フブスグル地方トナカイ遊牧民の生活形態のあらまし（その一）」田中克彦訳『北アジア民族学論集』4:27-49。

クラットン=ブロック, J.

1989 『図説 動物文化誌事典 人間と家畜の歴史』増井久代訳, 東京: 原書房。

Geist, Valerius

1998 *Deer of the World: Their Evolution, Behavior, and Ecology*. Mechfnicsburg: Stackpole Books.

Ikeya, Kazunobu

2001 Chukchi reindeer grazing and changes to grazing territory in northeastern Siberia. In D. G. Anderson and K. Ikeya (eds.) *Parks, Property, and Power: Managing Hunting Practice and*

Identity within State Policy Regimes (Senri Ethnological Studies 59), pp.81-100. Osaka: National Museum of Ethnology.

稲村哲也

2000 「ツァータン—モンゴル辺境部におけるトナカイ遊牧と市場経済化過程における社会変動」『エコソフィア』5: 101-117。

小長谷有紀

1990 「原点としてのモンゴル」梅棹忠夫『梅棹忠夫著作集 第2巻 モンゴル研究』pp.639-657, 東京：中央公論社。

1999 「モンゴルにおける出産期のヒツジ・ヤギの母子関係への介入」『民族学研究』64(1): 76-95。

松井 健

1989 『セミ・ドメスティケーション 農耕と遊牧の起源再考』東京：海鳴社。

2000 『西南アジア遊牧民族記』歴博ブックレット 15 佐倉：財団法人歴史民俗博物館振興会。

松原正毅

1983 『遊牧の世界：トルコ系遊牧民ユルックの民族誌から [上]』東京：中央公論社。

中田 篤

2003 「ツァータンのトナカイ牧畜—秋営地におけるトナカイ管理と利用—」『北海道立北方民族博物館研究紀要』12: 51-67。

2006 「冬営地におけるツァータンのトナカイ放牧」『北海道民族学』2: 30-37。

2007 「秋営地におけるツァータンの日帰り放牧—家畜誘導技法と放牧中のトナカイの行動について—」『北海道立北方民族博物館研究紀要』16: 37-54。

西村幹也

2003 「ポスト社会主義時代におけるトナカイ飼養民ツァータンの社会適応：モンゴル北部タイガ地域の事例」帯谷知可・林忠行編『スラブ・ユーラシア世界における国家とエスニシティ II』(JCAS Occasional Paper no.20), pp.45-58, 大阪：国立民族学博物館地域研究企画交流センター。

2008 「ツァータンのトナカイ飼育と管理方法—ポスト社会主義時代への対応のために—」『帯広大谷短期大学紀要』45: 21-32。

斎藤晨二

1985 『ツンドラとタイガの世界—シベリアの自然と原始文化—』京都：地人書房。

シロコゴルフ

1941 『北方ツングースの社会構成』川久保悌郎・田中克己訳, 東京：岩波書店。

高倉浩樹

2000 「群を放つ—トナカイ飼育における群の行動統御の概念と技術」松井健編『自然観の人類学』pp.213-246, 宜野湾：榕樹書林。

Takakura, Hiroki

2004 Gathering and releasing animals: reindeer herd control activities of the indigenous peoples of the Verkhoyansky region, Siberia. *Bulletin of National Museum of Ethnology* 29(1): 43-70.

谷 泰

1976 「牧畜文化考—牧夫 - 家畜関係行動とそのメタファー」『人文学報』42: 1-58。

1987 「西南ユーラシアにおける放牧羊群の管理—人・家畜関係行動の諸相—」 福井勝義・谷泰編著『牧畜文化の原像：生態・社会・歴史』 pp.147-206, 東京：日本放送出版協会。

梅棹忠夫

1990 「乳をめぐるモンゴルの生態（Ⅱ）—乳のしぼり方、およびそれと放牧との関係」 梅棹忠夫『梅棹忠夫著作集 第2巻 モンゴル研究』 pp. 214-266, 東京：中央公論社（初出は1951年、『自然と文化』2:119-172）。

Vainshtein, Sevyan

1980 *Nomads of South Siberia The Pastoral Economies of Tuva*. translated by Michael Colenso. Cambridge, New York and Melbourne: Cambridge University Press.

(なかだ・あつし／北海道立北方民族博物館)